3・11機に活動　信仰問わず心のケア

臨床宗教師が癒やす

仮設の被災者・重病患者・お年寄りにも…

人の苦しみ共に向き合う

東日本大震災を契機に、「臨床宗教師」と呼ばれる宗教者が各地で活動を始めている。布教や伝道を目的とせず、大災害の遺族や被災者らの心のケアを実践する専門家だ。東北大（仙台市）を中心に養成が進められてきた。東北の被災者らの悲嘆は癒えないどころか、生活が落ち着くにつれて逆に深まっている。冠婚葬祭中心の宗教界が、社会との関わりを取り戻せるかどうかも問われている。（林啓太）

・・・・・・・

東北大が、僧侶や神職、神父、牧師ら宗教者を対象に、臨床宗教師を育成する「実践宗教学寄付講座」を開講したのは、震災一年後の二〇一二年度だ。日本では、心のケアは主に医師や心理療法士に任され、宗教者が関わることは少なかった。講座を担当する鈴木岩弓教授（宗教民俗学）は「宗教者が、被災者や遺族の苦しみを癒やすことに貢献できるかどうかという問いに答えようとするものだ」と説く。

講座は三カ月単位で、「グリーフ（悲しみ）ケア」「精神保健」などの講義や、被災地の追悼巡礼、医療施設での実習などがおこなわれる。教えるのは大学教員ばかりでなく、被災者支援に携わってきた僧侶らも講師に招いた。一四年十二月までに計六回開かれ、約百人が修了証を手にした。

臨床宗教師の「原形」は、仏教や神道、キリスト教、新宗教の団体でつくる宮城県宗教法人連絡協議会の有志が一一年五月に設立した「心の相談室」だ。

仮設住宅などで被災者の悩みに耳を傾けた。所属する寺が津波で流され、親族の法要ができない人たちも大勢やって来た。

相談室の室長補佐で、牧師や神父らでつくる「東北ヘルプ」事務局長の川上直哉さん(四一)は「大震災の前から、医療者の一部から『宗教者も患者らの心のケアを担うべきではないか』との要望があった。震災で被災者の命が懸かった状況に直面し、宗教者がもっと社会で貢献していけるようにする必要があると考えた」と振り返る。自身の研究室で相談室の事務局を務めた鈴木教授は「宗教者が別の宗教の信者の慰霊や心のケアにどう携わるべきか。効果的な話し方や聴き方が求められた」と指摘する。

相談室は、特定の宗教によらず、被災者らに寄り添う宗教者の育成を目指した。名付けて「臨床宗教師」。実際の育成プログラムは、鈴木教授のいる東北大の育成講座の修了者に話を聞いた。

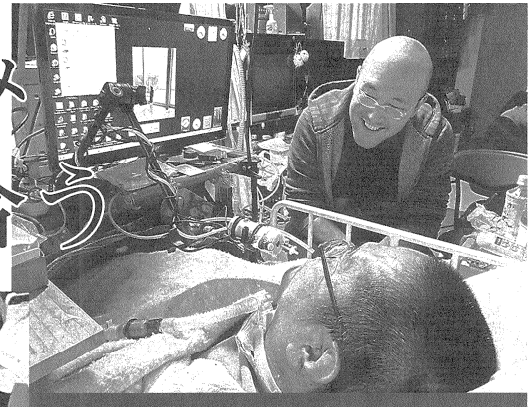
宮城県栗原市の曹洞宗城皇寺住職の氏家栄宏さん(四七)は、沿岸部の仮設住宅などを巡回している。「たとえ上手に話を聴けなくても、そばにいるだけで被災者は癒やされるのだと講座で教えられた。修了した後は当初の気負いがなくなり自然な気持ちで接することができるようになった」

栗原市の曹洞宗普門寺副住職の高橋悦堂さん(三五)は重病の患者と向き合う。頸椎損傷で二十年近く寝たきりの宮城県名取市の男性(四七)を月に一回程度訪問している。

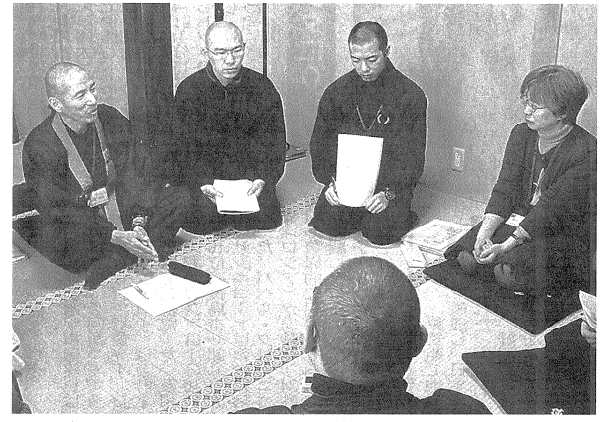
男性が「走り回ったりする自分を今でも夢に見る」とつぶやくと、「何でこうなるのか。人というものの運命は本当に分からない」と感謝する。高橋さんが提携する岡部医院（名取市）の佐藤隆裕院長も「医療者は医療的な問題にしか対応できず、痛みを和らげる処置に限界がある。臨床宗教師が医療の現場に加われば、患者を癒やす体制の強化につながる」と評価する。

仙台市の尼僧・天野和公さん(三六)のフィールドは老人介護の現場だ。

一月から週二回、心のケア中心のスタッフとして市内の特別養護老人ホームに通う。「『生きているのがつらい』『自殺したい』と訴えるお年寄りもいて返す言葉に詰まった」。特定宗派に所属しない寺院「みんなの寺」を市内で運営してきたが、「檀家や寺に来た人だけでなく、外部の人の苦しみにも向き合うことの大切さに思いが至った」と手応えを感じている。



◀寝たきりの男性（手前）の心のケアに取り組む臨床宗教師の高橋悦堂さん＝宮城県名取市で　▶特別養護老人ホームの利用者の話に耳を傾ける天野和公さん＝仙台市で



東北大の臨床宗教師育成講座の風景。受講者は福祉機関などでの実習後、感想を語り合った＝2014年11月、仙台市で

大学の育成講座から現場へ

冠婚葬祭中心の宗教界「社会問題の解決を」

死者・行方不明者、震災関連死が二万人を超えた東日本大震災からまもなく四年。衣食住の問題解決に手いっぱいだった震災直後と比べると、余裕がでた分、親族や友人を亡くした悲しみがかえって強くなっている面もある。

鈴木教授は「宗教者が公共の場で活動する本格的な試みは始まったばかり。宗教的な中立の観点から臨床宗教師の受け入れに慎重な病院もあるなど、浸透するには課題もある。現場で直面した問題を共有し、知恵を出し合って解決することが、活動を広める上で不可欠だ」と唱える。

宗教学者の島田裕巳氏は「臨床宗教師の活動が特に影響を与えるのは日本人の七割近くが信仰するとされる仏教の在り方だ」とみる。

「少子高齢化などが深刻化する中、癒やしを求める人は増えているが、（葬儀や法要に依存した）『葬式仏教』が主流であり、苦しむ生者を慰める活動は停滞している。仏教は宗派の組織力が健在だ。臨床宗教師を育成すれば、社会問題の解決や緩和に貢献できる可能性は高い。道元や親鸞ら宗派の始祖は、生者の苦しみにも向き合ってきた。始祖らの思想に立ち返れるかどうかが問われている」

デスクメモ

3・11以降、宗教がメディアに登場する機会が増えた。特報面では、原発関連ということになろうか。各地の脱原発運動には、宗教者が多く関わる。全日本仏教会は「脱原発依存」を宣言した。脱原発も復興も光明が見えない。戦争の足音も聞こえる。生者の苦しみが深まる今、「臨床宗教」への期待は大きい。（圭）